

令和8年度 鹿屋中央高等学校入学試験問題

国語

注意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて十一ページです。これとは別に解答用紙が一枚あります。
- 3 受験番号は、解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 4 答えは、問題の指示に従って、**すべて解答用紙に記入しなさい。**
- 5 監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

受験 番号	
----------	--

1

次の1～3の問いに答えなさい。

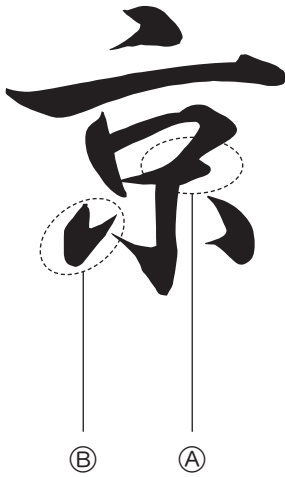
1 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は仮名に直して書きなさい。

- (1) 労働のチンギンを受け取る。
- (2) 宿題をすぐにスミス。
- (3) 不朽の名作と呼ばれる。
- (4) 土で穴を塞ぐ。

2 次の——線部のカタカナを漢字で書くとき、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- (1) あの姉妹はタイシヨウ的な性格だ。
ア 対照 イ 対象 ウ 対償 エ 対称
- (2) 他人に迷惑を力けてはいけない。
ア 懸 イ 賭 ウ 掛 エ 係

3 次の行書で書かれた漢字について、点線①・②に囲まれた部分に表れている行書の特徴の組み合わせとして最も適当なものを、あとのア～エから選び、記号で答えなさい。



- ア ①点画の連続 ②点画の変化
- イ ①筆順の変化 ②筆順の変化
- ウ ①点画の省略 ②点画の変化
- エ ①点画の連続 ②点画の省略

2

次の【詩】と【鑑賞文】を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。

【詩】

旅情

いしがき
石垣りん

ふと覚めた枕もとに
秋がきていた。

遠くから来た、という
去年からか、ときく
もっと前だ、と答える。

おとしか、ときく。
いやもっと遠い、という。

では去年私のところに来た秋は何なのか
ときく。

あの秋は別の秋だ、
去年の秋はもうずっと先の方へ行っている
という。

先の方というと未来か、ときく。
いや違う、

未来とはこれからくるものを指すのだろうか？
ときかれる。
① 返事にこまる。

では過去の方へ行ったのか、ときく。

過去へは戻れない、
そのことはお前と同じだ、という。

秋

がきていた。

② 遠くからきた、という。

遠くへ行こう、という。

【鑑賞文】

題名からして、詩人は旅に出ているのでしよう。知らない町の、質素な旅館。和風で、畳の敷かれた部屋。夜、布団の中でふと目が覚めると、枕元にひっそりと〈秋〉が坐すわっていた。

そして不思議な対話が始まります。

「遠くから来た」と言う〈秋〉。詩人はその佇たたずまいに、彼(?)が遙はるか私たちの日常の外の時空からきたと予感したのでしようか。「遠くから」と空間の遠さを言った〈秋〉に向かって、「去年からか」、そうでなければ「おとし(から)か」と、時間軸に沿った問いを發します。

問われた〈秋〉にとっては、時間も空間も同じことであるようです。詩人の「去年からか」という問いには「もっと前だ」と(問いと同じ時間軸に沿って)答えますが、「おとし(から)か」という問いには「いやもっと遠い」と(時間ではなく距離つまり空間で)答えます。

読者はこの辺から、空間と時間が微妙に重なり合う、不思議な時空へと誘い込まれます。〈秋〉は言います。自分は去年の秋とは違う、「去年の秋はもうずっと先の方へ行っている」。

読者の心には、宿の部屋の外に拡ひろがる遙かな時空の広がり、そこに並ぶ長い〈秋〉たちの列が見えてきます。〈秋〉たちは一人(?)ずつ、その長い列から宙に弧を描くように私たちに近づいてきて、しばらく地

上を秋の色に彩いろどっては、やがてまた、来たときと同じように、遙かに遠い彼方へと去って行く。

だが、〈秋〉たちがそこからきて、またそこへ去って行く不思議な〈時空の彼方〉とは何なのか。詩人もまた、それを知りたいのでしよう。去年の秋が去って行った「先の方」とは未来なのか、過去なのかなどと、いろいろ〈秋〉に質問しますが、〈秋〉は奇妙に論理的で、逆に反問されたりするので、詩人は「返事にこまる」。

この詩人特有の(ある時期以降のこの詩人が獲得した)絶妙なユーモア感覚ですが、では詩人は〈秋〉の論理的な反問に対して、なぜ「返事にこまる」のか?

それはたぶん、詩人も使っている私たちの言葉が、根本のところ、三次元の空間と一次元の時間で構成されている私たちの時空の言葉であるからでしょう。私たちの言葉は、〈秋〉たちが住む宇宙の超越的時空の消息を扱うには不十分なもののなのです。

最近の現代物理学の見解だと、宇宙は(もちろん私たちには実感できませんが)十一次元なのだそうです。〈秋〉たちの住むのはたぶんその十一次元時空なのであって、毎年その季節になると、一つの〈秋〉がその十一次元時空の彼方から姿を現し、私たちの時空を訪れ、そしてまた十一次元時空へ去って行くのでしよう。

だが詩の最後、〈秋〉はさりげなく大事な一言を言います。「遠くへ行こう」。詩人への誘いの言葉です。

「遠くへ行こう」という〈秋〉の誘い。その魅惑的な言葉に詩人は何も答えず、「遠くへ行こう、という。」と、ただ〈秋〉の言動を客観的に伝えるだけで、詩を閉じる。しかしその閉じたあとの沈黙の中で、詩人の心は〈秋〉の誘う「遠く」の時空へと彷徨さまよい始めています。

〈秋〉の誘い。「遠くへ行こう」——。その誘いのことばに、詩人のみならず、私たち人間の心は、なぜか引きつけられ、憧れに似た感情に動

かされる。

それはたぶん、私たちの本来の居場所もまた、ほんとうは「遠く」に、つまり、〈秋〉たちがそこから出発し、そこへ戻って行く十一次元時空にこそ、あるからなのでしょう。

私たちはかつて十一次元時空に住んでいたのが、あるとき生を享けて、この地球にやってきて、かりそめこの地上に住み、かつての時空を忘れていた。しかし、ある年配になると、〈秋〉が訪れて囁くのです。そろそろ遠くへ、もともとのふるさとへ、戻って行くころだよ……。

同じ風土に生きた古代の歌人もまた、同じ秋の囁きに耳を澄ませていました。

秋きぬと 目にはさやかに 見えねども

風の音にぞ おどろかれぬる

藤原敏行

夏の終わり、まだ暑さの名残りの去りやらぬ一日、そろそろ日暮れに近い頃でしょうか。夕風が庭の木々を吹き過ぎて行き、その音で、季節はもう秋なのだということに気付く。

四季の変化に敏感なこの国の、ひとの心の動きが映っている歌です。だが、それにしても、この歌人は秋の訪れに気付いて、何故、ことさらに驚いたのででしょうか。ただ気付いた、というのでは、不足だったのでしょうか。

それも、ただ驚いたのではない。そこにはどこか、知りたくないことを知ってしまったという響きがあります。仮にこれが思いがけず春を知らされたのだったら、歌人は胸を躍らせこそすれ、こういう驚き方はしなかったのではないか。

この歌にあるのは、ただ四季の変化への敏感さだけではないのです。

むしろ、ふと気付いた四季の変化に、自分の生の時間がかくも素早く過ぎ去って行くことを知らされた時の驚き。

それがこの歌の内実であると私には思われます。

千年を越える昔にも、現代の女性詩人が旅の宿で聞いた十一次元時空への秋の誘いと同一誘いの声を、秋風の響きとともに耳にした人がいたのです。

しかし、同じ秋の囁きを耳にしながらも、少し違う思いで、それを心に受け入れた人もいました。およそ二百年ほど前、江戸時代後期の歌人です。

風は清し 月はさやけし いぎ共に

踊り明かさむ 老いの名残りに

良寛

秋の風景ですが、紅葉の木々の彩りはなく、ただ澄んだ月の光、そこを吹き過ぎて行く微風、そして静かな光の下で踊り続ける老人たちの姿が見えます。

音は聞こえてきません。

この歌の静かな華やぎ。その無彩色の華やぎゆえに、いっそう深い寂しさ。

この歌人もまた、死からの使者である秋の囁きに耳を傾けています。ただ、僧でもあったこの歌人は、秋の誘いを受けても（藤原敏行とは違って）それにことさら驚くことはなく、そのまま素直にそれを受け入れています。

自分の老いを知り、訪れの近いだろう死を予期し、恨みなくそれを受け入れて、それまでに許される名残りの時間を、歌人であり僧である彼は、老いの仲間とともに、静かに楽しみ踊りつづけるのです。

（柴田翔『詩に誘われて』による）

1 線部①の表現に【鑑賞文】の筆者が感じていることとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 強調された悲しみ。 イ 巧みなおかしみ。
ウ 断固とした冷静さ。 エ 俗っぽいごまかし。

2 線部ア、エの「に」の中から、品詞が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

3 線部②についてまとめた次の文のⅠ、Ⅱに入る最も適当な言葉を、Ⅰは九字、Ⅱは七字で【鑑賞文】の中から抜き出して書きなさい。

詩人も私たちも、〈秋〉が住む宇宙を扱うには不十分なⅠを使っているため、「遠く」とはどのようなかを明らかにすることはできない。しかし、「遠くへ行こう」という誘いは、詩人だけでなく私たちにⅡを抱かせるものである。

4 次は、【詩】と【鑑賞文】を読んだ後の、先生と小山さんの会話です。□に入る内容を、【鑑賞文】に即して七十字以内で補い、会話を完成させなさい。

先生 「筆者は「秋の囁き」を聞いた二人の歌人の和歌を挙げていますが、その二人の「秋の囁き」に対する反応には違いがありますね。」

小山さん 「はい。□ということが違いますね。」

先生 「そうですね。でも、違うとはいえ、両者に共通しているのは、生と死に対する思いであることがわかりますね。」

5 この【鑑賞文】の特徴について説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 二つの和歌と一つの詩に共通するテーマを見だし、時代が進むにつれて深まる人間の思考について考察している。
イ 一つの詩と二つの和歌が示す、異なる感情の対比に筆者の体験を交えて、人間関係の移り変わりについて考察している。
ウ 一つの詩から導かれたテーマについて、同様のテーマをもつ二つの和歌を挙げ、人間のあり方について考察している。
エ 一つの詩と二つの和歌を対比し、それぞれが生まれた歴史的背景を重視しながら、日本語の変化について考察している。

次の【本文】と、それについて述べた【資料】を読んで、あとの1、4の問いに答えなさい。

【本文】

これも今は昔、土佐判官代通清といふ者ありけり。歌を詠み、源氏、

狭衣せごもなどをうかべ、花の下、月の前と好き歩きけり。かかる好者すきものなれ
物語ものがたりや「狭衣物語」などをそらんじ(注)（風流を好んで歩き回っていた）
（源氏）

ば、後徳大寺左大臣、(注)「大内の花見んずるに、必ず」といざなはれけれ
（花見をするので、必ずまいれ）

ば、通清、めてたき事にあひたりと思ひて、やがて破車やれぐまに乗りて行く程
（傷んだ牛車）

に、跡より車二つ三つばかりして人の来れば、疑ひなきこの左大臣のお
（後ろから）

はすると思ひて、尻のすだれをかき上げて、「あなうたて、うたて、と
（あま遅い）

くとくおはせ」と、扇を開いて招きけり。はやう関白殿の物へおはしま
（だが、関白殿があるところへおいでになる
く早く）

すなりけり。招くを見て、御供ごけいの隨身ずいじん、馬を走らせて駆け寄せて、車の
（お供の人）

尻のすだれをかり落としてけり。その時ぞ通清あわて騒さわぎて、前より転
（切り落とした）

び落ちける程に、烏帽子落ちにけり。いといと不便ふびんなりけりとか。好き
（慌てふためいて）

ぬる者は、少しをこにもありけるにや。
（まぬけ）

『宇治拾遺物語』による

（注）大内＝京都の仁和寺であると考えられている。

【資料】

『宇治拾遺物語』の中で、この【本文】には「土佐判官代通清、人違たがひして関白殿にあひ奉る事」という題がついている。登場人物の通清は、文章にあるように和歌をたしなむ人で、一一八八年成立の勅撰和歌集（天皇や上皇の命令でつくられた和歌集）『千載和歌集』にも一首入集している。後徳大寺左大臣からの花見の誘いは、「好者」（風流を好む者）として認められた名誉のあるお誘いであり、うれしいことだったのである。ところで、【本文】の中の「関白殿」は藤原基通を指すと考えられているが、関白は左大臣よりさらに偉い役職である。

1 — 線部①「いざなはれ」を現代仮名遣いに直して書きなさい。

2 — 線部②のここでの意味を、【資料】から抜き出して書きなさい。

3 — 線部③「尻のすだれをかき上げて」の主語として正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 通清

イ 関白殿

ウ 御供の隨身

エ 馬

～線部について、高木さんのグループは課題を設定し、授業中に話し合いを行いました。次は、話し合いの内容をまとめた「フートの一部」です。あとの(1)・(2)の問いに答えなさい。

フートの一部

課題

通清はなぜ「慌てふためいた」のだろうか。

着眼点

○【本文】では、通清は、後ろから来た牛車の人に「ああ、遅い、遅い、遅い、遅い、遅い、遅い」と言った。

○【資料】にある【本文】の題には、「人達」という言葉がある。

まとめ

通清は、後ろに左大臣がいると思っていたところ、突然

(1) I、II に適当な言葉を補って、ノートを完成させなさい。

い。ただし、I には五字以内で考えて書き、II には「牛車」という言葉を使って十五字以内で書きなさい。

(2) 次のア～エは、話し合いの後に、グループの生徒たちが【本文】や【資料】の内容について述べたものです。【本文】や【資料】の内容に合致する発言として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 通清は風流人であるうえに、牛車から落ちるといふ他人の失敗を笑うことはしない人格者だったのでね。

イ 通清は風流人でしたが、花見の日に有頂天になってはしゃぎすぎて失敗してしまったということですね。

ウ 通清は風流人であるうえに、わざとまぬけなことをして人を笑わせるような愉快な人だったのでね。

エ 通清は風流人でしたが、牛車で人に意地悪なことをしたために天罰が下ってしまったということですね。

次の文章を読んで、あとの1～4の問いに答えなさい。

中学三年生の真は、両親には内緒で、同級生の梨々と協力して「全国学生チェアデザインコンペ」に挑戦することにした。この日は真の家でその準備をしていた。

デザインはまだ完成していないけど、昨日の夜描いたアイディアスケッチを、机の上に並べた。

「どんどん絵がうまくなってきてるね」

ほめられても、あまりうれしくない。「これだ！」というデザインが決まっていないうれさだろうか。アイディアが煮え切っていないスケッチを見て、ぼくは小さくため息をついた。

「コーヒーをどうぞ」

かあさんが食後のコーヒーを持ってきた。

「あ、ごめん、オレがやるからいいのに」

あわてて、部屋の入り口でトレーを持ってこっちを見ているかあさんに走り寄る。

「ありがとう」

「あら、なに、イスのデザイン？」

首を伸ばしたかあさんの視線は、机の上のスケッチで止まった。

「あー、いや」

なんと行ってごまかすか。

「真、いいわよ、わたしには本当のこと言いなさいよ。おとうさんは黙っておいてあげるから」

べつに、と言いかけるが、机の上にはおびただしい数のイスのスケッチが並んでいる。ごまかすのはかえっておかしい。

ぼくは白状することにした。

「じつは、七月の全国学生チェアデザインのコンペに出そうかと思っ

て……まあ、なんていうか、バスケの県大会に出るとか、そういうノリで……」

「ふうん。いいじゃない。梨々ちゃんも?」

「うん」

ちらっと梨々をふり返る。梨々はニコニコしてこっちを見ている。

「じつは、梨々んちはイスの制作会社で、小さいころから修業しているから、彼女いろいろできるんだ。とりあえず、とうさんには内緒にしておいてくれるかな」

かあさんはぼくと梨々を交互に見つめて、うなずいた。

「なるほど、チームを組んでいるのね。でも、あとでおとうさんにバシてめんどうなことになるなら、今のうちに言っておいたほうがいいかもしれないわよ。あ、六月に中間テストがあるでしょう? そのあとのほうがいいかもね」

「……うん。まあ、よく考える」

「そう。じゃ冷めないうちにコーヒーをどうぞ。コンペ、がんばってね」

かあさんは指でVサインを送ると、きびすを返した。

「はは。Vは勝利のVだ! がんばらなきゃね。良かったじゃん、おかあさんに認めてもらえて」

梨々は、コーヒーにスティックシュガーを三本も入れながら言う。

「うん、かあさんはいいんだ。問題は……オヤジだよ」

かきませたコーヒーをすすりながら、ふうん、と梨々は軽く言った。オヤジの怖さを知らないからだろう。

② 「でもさ、次も学年で五位とかだったら、バレてもべつに平気でしょ。ほんっと頭いいもんね。真がうらやましい」

素直にうなずけない。必死に勉強しているのと、記憶力がいいってだけで、たいした脳みそなんかじゃない。

だいたい、いつも吐きけをもよおしながら、いやいや勉強をしている。数学や英語は将来役に立つかもしれないと思う。理科でも物理は好きだけど、化学記号なんて、いったいイスとなんの関係があるのだろうか。

「……オレは、数学の天才のカトシユンとか、モデラー(注)の素質があって基礎もちゃんとできてる梨々のほうが、数倍スゴいと思うけど」

数学が大好きで得意なカトシユン。イス作りが大好きでモデラーとしての実技に長けてる梨々。二人とも、好きなことで秀ひいでていて。自分はどうだろう? 本当にデザインの才能があるのか? それとも、ただ好きなのだけなのか?

「そんなことない! あ、加藤くんはたしかに数学の天才だけど、得意科目と不得意科目が両極端だし、わたしはイス屋で育ったってだけで、勉強は全部ダメダメ。こないだのテスト、一二人中、八十五番だったよ。後ろから数えたほうが早いんだから!」

あつげらんかんとしている梨々を見て、ますますうらやましくなる。もしぼくがそんな成績を取ったらどうなるだろう。

中学一年のとき、入部して間もないのに、バスケットボール部のレギュラーメンバーにばってきされて猛練習をさせられ、しばらく勉強をなまけていたときがあった。県大会の結果もさんざんだったが、中間テストの成績は急降下して、最悪だった。

そのとき、仁王立ちしたオヤジにガンガン怒鳴りつけられた。(中略) ぼくは大泣きした。オヤジが心底怖かった。そのとき、バスケット部をやめろと言われた。

結局、期末試験では成績を必ず挽回ばんかいするという約束で退部しないですんだけど、それ以来、オヤジに怒られないだけのために、勉強をした。部活のあとは塾にも通い、へとへとになったけど、成績はぐんぐん上がっていった。

ちっとも楽しくなかなかった。バスケットも塾も、義務感だけで続けていた。

ただ、イスの絵を描いているときだけは、自由になった気がした。なにもない真っ白い紙に、形をどんどん描いていく。線が面になり、影をつけると立体的になっていく。架空の空間に、イスを生み出す。恐ろしい忘却のイスや、壇上(注)の玉座や、エジプトの折りたたみイスとはちがう、自分が今、すわりたいイス。いつかだれかにすわってもらいたいイス。それはぼくにとつて、鎖(注)で縛られている心を解放できる唯一の時間だった。

「そんな深刻な顔しないでよ。ねえ、おいしいコーヒー冷めちゃうよ」
言われてふと見ると、ぼくはコーヒーにまだ口をつけていなかった。
湯気はとつと消えていた。

(佐藤まどか『一〇五度』による)

(注) コンペ⇨複数の案を競わせて、最も優れたものを選定すること。

モデル⇨ここでは、椅子をデザインして制作する人。

忘却のイス⇨人の記憶を失わせる椅子。ギリシヤ神話に登場する。

壇上の玉座⇨王様が座る立派な椅子。

エジプトの折りたたみイス⇨古代エジプトの遺跡から発見された折りたたみ椅子。

1 線部①「煮え切っていない」のここでの意味として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 優れていない イ がんばっていない
ウ はっきりしない エ 本調子ではない

2 線部②のように言われたときの真の気持ちとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の抱える不安や積み重ねた努力を正当に見てもらえず、表面上の成績だけを称賛されて、いらだちと煩わしさを覚えている。
イ 努力や不安はさておき、才能のある人から褒められて安心する一方で、自分が今後何を目指せばいいのか分からなくなっている。
ウ 褒められたことで、かえって自分には才能のある人のように胸を張れるものがないという思いが強まり、やる気を失っている。
エ 自分の努力や不安が理解されなのまま評価されていることに納得がいかず、才能のある人との違いを意識してしまっている。

3 次は、本文について話し合っている生徒たちと先生の会話です。

Ⅰ ⇨ Ⅲ に適当な言葉を補って、会話を完成させなさい。ただし、Ⅰ は本文中から八字で抜き出し、Ⅱ、Ⅲ はそれぞれ【Ⅱの選択肢】、【Ⅲの選択肢】から最も適切なものを選び、記号で答えることとします。

春山さん 「真と梨々は、性格や考え方がいろいろと違っているね。」

夏木さん 「真から見ると梨々は、イスを制作することに関してⅠ

点でまぶしい存在なのだね。」

秋本さん 「それに加えて梨々が、Ⅱ ことが、真にとってはよいにうらやましいことなんだと思うよ。」

先生 「真の複雑な心情は、文章の特徴に注目すると、より理解しやすくなります。Ⅲ という点がこの文章の特徴です。」

【Ⅱの選択肢】

ア 学校での自分の成績のことを気にせず平然としている
イ 好きなイスのこと以外語らずあっけらかんとしている

ウ 学校の勉強のことで自分と真を比べて謙遜している
エ 勉強よりもイスが好きだと明言して堂々としている

【Ⅲの選択肢】

ア つらかった過去の場面を挟みつつ、真が家族とのかかわりを省みて、その影響を乗り越えていく様子を描いている

イ 過去の出来事を振り返る描写を含め、現在の真が自らの価値観を見つめ直し、自信を取り戻していく過程を表現している

ウ 現在の場面描写の中に過去の記憶の場面を織り込み、真の内面にある葛藤や心の救いを深く、印象的に表現している

エ 過去の経験と、現在登場する憧れの人物との比較により、理想と現実の違いに気づいて成長していく真の姿を描いている

4 — 線部③とは、どのような心か。真の家族関係や日々の生活に触れながら、「自由」という言葉を使って七十字以内で書きなさい。

5

木田さんの学級では、授業で「自分の居場所」というテーマで意見文を書くことになりました。次は、先生と木田さんのグループの生徒たちの【会話】と、その際に示された【資料】です。これを読んで、あとの1・2の問いに答えなさい。

【会話】

先生 「今日は【資料】の項目を参考にしながら、自分にとっての居場所を考えてみましょう。」

木田さん 「僕の居場所は自分の部屋。疲れて帰ってきててもベッドに倒れ込むだけで楽になる。つまり、何もせずのんびりできる、ありのままでいられる場所かな。」

森口さん 「私はインターネット空間だな。絵を投稿すると海外の人まで反応してくれるから、好きなことをして自由に過ごせて、新しいことにチャレンジできる場所。」

木田さん 「僕にはないおもしろい視点だ。川野さんは？」

川野さん 「学校。部活でクラスの違う人と話せるし、いろんな人と出会えて、だれかと一緒に過ごせるのが好き。」

青木さん 「ところで水野さん、地域の図書館がリニューアルしたって知ってる？ 公民館と一体で静かな勉強スペースも増えたそうだよ。」

水野さん 「行ったよ。司書さんに進路の本を選んでもらって、悩みも聞いてくれたの。私は知らないことを学べて、将来へのヒントをくれる図書館が居場所だな。」

先生 「ではみなさん、意見文を書いてみましょう。」

問：次のそれぞれの場所は、あなたにとってどのような場所ですか。この中からあてはまるものを、いくつでも選んでください。

		B			
		なにもせずのんびりできる、ありのままにいられる	悩みの相談ができた、自分の意見や希望を受け入れてくれる	いろんな人と出会う、だれかと一緒に過ごせる	好きなことをして自由に過ごせたり、新しいことにチャレンジできる
A	自分の部屋	67.0	11.4	7.1	18.6
	家庭	57.1	32.4	14.5	16.3
	習いごとや趣味のサークル	10.4	12.5	27.7	18.7
	学校	15.0	22.4	54.0	23.8
	職場	11.2	20.1	37.7	14.7
	地域の公共施設	21.1	8.9	20.9	16.0
	SNSなどのインターネット空間	36.2	15.1	23.9	32.1

調査：全国の満13歳から満29歳までの男女 (%)

(こども家庭庁「こどもと若者の意識に関する調査(令和5年度)」より。)

一部表記を改めたところがある。)

1 【会話】における、青木さんの発言について説明しているものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 【資料】には書かれていない場所へと話題を広げている。
- イ 水野さんに発言を促すために、新しい話題を示している。
- ウ 前に出た意見をまとめたうえで、話題を転換している。
- エ 川野さんの発言を受けて、別の具体例を示している。

2 あなたなら、どのような意見文を書きますか。あとの(1)～(4)の条件に従って書きなさい。

条件

- (1) 二段落で構成し、六行以上八行以下で書くこと。
- (2) 第一段落には、自分が取り上げる居場所を、【資料】のAの中の言葉を使って示すこと。
- (3) 第二段落には、第一段落で取り上げた場所について、自分にとってどのような場所であるかを、【資料】のBの中の言葉を使い、自分の見聞や体験を踏まえて書くこと。
- (4) ※ 【資料】のA・Bの中の言葉は、そのまま引用しなくてよい。
原稿用紙の使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
ただし、資料を示す場合や、資料中の数値をそのまま使用する場合は、次の例にならって書くこと。

例 【資料】 ↓ 資料

数値 ↓ 一〇・四%

